必要な知識が全部盛り『子どもの命を守る』ための必読書

保育者のための「ハザード」教室
子どもの「危ない！」の見つけ方・伝え方

所 真里子・掛札逸美ほか・著

Ｂ５判・並製・118ページ
2,420円（税込）
（株）ぎょうせい
TEL 0120-953-431
https://gyosei.jp/

保育施設で仕事をしていてもっとも心を痛める瞬間は、やはりお預かりしている子どもたちの事故ではないでしょうか。ましてそれが、後遺症が残るようなケガや命に係わるものであれば、被害に合った子どもと保護者はもちろん、関わった保育者の心痛も計り知れません。

そんな事態を避けるために、必要な知識、具体的な事例がまとめられている書籍がほしい。欲を言えばイラストが多めで、読みやすいものがあれば最高です。そんなワガママを叶えてくれるのが本書です。では、さっそく本書の魅力をぎゅっと3つに絞ってご紹介していきます。

まず、1つ目のお勧めポイントは、ずばりタイトルにもある『ハザード』に関して学べることです。ハザードとは『危なさ』そのものを表し、深刻なものから、それほどでもないものまであります。園内のハザードを見つけ、それぞれの危なさが持つ深刻度を見分ける方法を丁寧に教えてくれます。特殊な用語を避けてくれているので、理解しやすいのも助かります。

ハザードに『人に危害がおよぶ確率の高さ』を掛けたものがリスク。ただ闇雲にハザードを怖がる必要はなく、発生確率との掛け算で高リスクとなるものを見つけ出して、環境や運用を配慮することでリスクを減じていくというアプローチが、本書の基本スタンスです。

そして2つ目のお勧めポイントは、『第0章』です。いわゆる序章ですが、内容がとにかく素晴らしいです。

要約してお伝えすると、保育施設はただ子どもを預かるのとは違い、子どもの「命」を預かる場所である。「命を守ること」＝「ケガをさせないこと」ではない。子どものケガの多くは子どもが育つから起こるもの。つまずく、転ぶ、滑る、ぶつかるといったできごとを避けて、子どもは育つことができない。だから、この本ではケガをゼロにするためではなく、死亡や重症、後遺障害につながる深刻な事故やケガが起こらない園の環境づくりについて扱う、とのこと。このまま園だよりに書き写して配布したくなりますね。私はこの序章だけで心をグッと掴まれました。

最後の、3つ目のお勧めポイントは、本書がとにかく実用性を重視して作られている点です。本書の半分は保護者への情報発信に充てられています。子どもたちの命を守るには園だけでなく、保護者の協力が不可欠だからです。

安全のためにフード付の服をやめてほしい、送迎時の路上駐車を控えてほしいなど、多くの保育施設で保護者理解を得るのに毎年苦労している項目がすべて網羅されており、適切な情報発信の参考になります。しかも、なんと本書をそのままコピーして、掲示やおたよりなどの配布に使えるようになっているのです。こんなに保育者に寄り添ってくる本はめったにありません。実用性の塊、すべての書籍がこうなら、どんなによいでしょう。

というわけで、なんとか魅力を3つに絞りましたが、本当は、弁護士事務所監修のコラムがグッと心に迫ることや、文字数が少なめなのがこっそり嬉しいこと、巻末付録がまたまた実用性が高いことなど、魅力はたっぷりあります。

多忙を極める私たち保育者に、驚くほど寄り添ってくれる本書。子どもたちの命を預かるすべての施設に必置の1冊です。

（山田裕宇記／全私保連広報部）